

2021年12月31日(金)

老球の細道648号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今年は真珠湾攻撃80周年だという。この月は「太平洋戦争開戦」と「赤穂浪士忠臣蔵」の話題については特に関心を持って接することになっている。生か死か、避けることはできなかったのか、リーダーの究極的な状況判断のあり方に自分を置きかえながら毎年考える。

ところで、私が考える理想のリーダー「大石内蔵助」と鬼平犯科帳の鬼の平蔵こと「長谷川平蔵」をドラマで演じた歌舞伎俳優の中村吉右衛門が亡くなった。合掌。

1・テレビから

◆「あら楽し 思ひは晴るる 身は捨つる 浮世の月に かかる雲なし」〈BS11『大石内蔵助良雄：偉人素顔の履歴書』〉：毎年12月になると「忠臣蔵」に関するTV番組は欠かさず見る。大石の本懐を成し遂げた後の辞世の句である。死ぬ前にこのような句を詠める武士の魂に羨望の念を禁じ得ない。私の辞世はせいぜい「飯上手い 昼は元気だ 夜眠い」か。

◆「あてどなき 星の流れて またの明日」〈吉田類の酒場放浪記〉：毎週全国のこだわりの居酒屋で極上の料理、隠れた銘酒などが紹介される。飲み過ぎた夜に録画したのを垣間見ながら「いいなー！美味しい料理と銘酒、ビールを飲むのが仕事なんて」とうらやみながら見ている。居酒屋を出る時に画面に映し出される墨さんの俳句がまた渋い。飲み会が懐かしい。

2・読書から

◆「惜しむとて 惜しまれぬべき この世かは 身をすててこそ 身をも助けめ」〈瀬戸内寂聴著『白道』講談社〉：著者の死によって再度読んだ本である。23歳で出家し、月と花を友とし、新幹線もビジネスホテルもなかった時代、全国を遍歴しながら生きた西行の歌である。余分なものを捨て、幸せを感じ、納得できる本質的な生き方をせよと教えてくれる。

3・新聞、パンフレット等から

◆「知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり」〈朝日：折々のことば・孔子〉：Youチューブなどで世界の名だたるコーチのクリニックなどを見ると、知っていると思っていたバスケットのこともまだまだ知らないことがあったことを知り、愕然とすることがある。ソクラテスも言っている「無(不)知の知なり」。知ったふりしないでまだまだ謙虚に学びたい。

◆「事実がなければ、真実を知ることはできません。真実がなければ信頼は生まれません。信頼がなければ、共有できる現実も民主主義も存在しない」〈朝日：ノーベル平和賞受賞演説：マリア・レッサ〉：世界は今、民主主義国家と強権主義国家に2分されていて、強肩主義国家を支持する割合が増えているという。事実を吟味し、批判精神を忘れてはいけない。

◆「高齢になって、後悔することは何ですか、の問いで最初に思い浮かぶのは、したことでなく、しなかったことのように」〈公立共済友の会だより：いきいき人生〉：棺桶に接近してきた今、この言葉に同感である。学校と言う狭い世界で、前例にないことや非常識なことをやって色々批判されたりしてきたが、途中で止めないで良かった。人はいずれ死ぬ。